
『**ダーク・ロード** **黄昏に抗う者**』

S・HUNTER

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『ダーク・ロード』

黄昏に抗う者』

【Nコード】

N2947Z

【作者名】

S・HUNTER

【あらすじ】

桐生貴夜は生まれ持つての外観と学年トップの成績、そして反抗的な態度によって一部の不良生徒から虐待を受けていた。彼は暴力的な行動を嫌い、親友である神代顕人にも、自分の為に暴力で持つて復讐するのを止めているほどであった。

無残な死体を残し、街を恐怖に陥れている連続殺人事件が続いていたある夜、貴夜はその犯人と思しき黒衣の大男とであった。その男は『オーガ』と呼ばれている『闇の種族』^{ダーク・レイズ}で、男は潜在的に強力なパワーを持つ貴夜の魂に惹かれ、貴夜を手に入れようと考える。

黒衣の男 闇に堕ちる以前は、かつては『闇の種族』と敵対していた『聖戦士』だった。が貴夜に襲い掛かる寸前、それを阻止した少女の名はリーゼロッテ。『闇の種族』の中でも『主』^{ロート}と言う上級のカテゴリーに属する、青と紫の瞳を持つ小柄な美しい少女だった。しかも古代の魔術を駆使する『護法魔導師』と言う魔術師でもあるのだ。

『オーガ』を撃退した後、リーゼロッテは貴夜自身が『主』^{ロート}としての種であることを告げ、『オーガ』の手から守ることを約束した。貴夜を『主』^{ロート}として覚醒させる儀式を執り行っていた時、『教会』の『聖戦士』がリーゼロッテを襲撃した。本来は『オーガ』を始末する為に派遣された『異端処理官』ヴィートーリオは、偶然に見つけた『七主』であるリーゼロッテに功名心を刺激されたのだ。

プロローグ

どこの国でもそうなのだろうが、この国の国際空港のロビーも酷く混雑していた。

雑多な肌と髪の色の様々な人種が、極東のこの国のどこよりも多くそこには集まっているが、その少女はその中でも一際目立つ存在だった。

特に大きな体格ではない。いや、どちらかと言えば小柄で華奢な体つきの愛らしい少女だ。淡い浅葱色のワンピースがさらに愛らしさを醸し出している。

年の頃は十五、六であろうか？ 人形のように整ったその顔はどこかつまらなそうな表情で、ロビーのソファに座ったまま行き交う人々を眺めていた。自分が人の目を集めていることに気づいてもない。

細い金糸を集めたような、白い輝きを放つ腰までの長いプラチナ・ブロンドは、淡い水色のリボンが飾られ、北欧人のようなミルク色とは趣の違う、蒼白いほどの白い肌に相まって、どこか作り物じみた外見を強調している。

しかも天上の名匠による奇跡の造型だ。人間の手にはこれほどの美しさを顕わすことなど、きつとできはしないだろう。

少女が人工的な印象を与えるのは、きつとその瞳の色にも理由があるであろう。

左右の色がはっきりと違うそれは、オッド・アイとか金銀妖瞳とか呼ばれているものだ。地方によってはいまだに魔女の印、邪悪の象徴ともされている。

右目は夜明けの空のような青。左目は黄昏に近い空の赤味を帯びた紫色。

どこか幻想的な美しさを見る者に印象づけるその瞳こそが、少女の存在そのものを顕わしているようだった。幽玄の、どこか生身の

人間とは思えないようなその印象のすべてを……。

少女の傍らには、さらに幼い少女が座っていた。

十歳に満たないであろうこれもまた愛らしい少女だった。藍色に近い黒髪を背中まで伸ばし、大きな赤いリボンを飾っている。その大きな瞳は青空を氷で閉じ込めたような鮮やかな水色をしているが、どこか表情に乏しい落ち着いた雰囲気を醸し出している。

二人の美少女は、自分たちに向けられている視線をまるで感じる様子もなく、どこか超然としてソファに座っていた。周りの一切を存在しないものと振舞っているかのようにも感じられる。

「本当にゴミゴミした所ね。それに空気も良くないわ」

金髪の少女はつまらなそうな声で呟いた。桜色の唇がすこし突き出ている。

先ほどまでの作り物じみた印象が、そこでがらりと変わってしまうような表情と口調だった。つんとしたその顔は急に生氣を感じさせる。

「時代が変わってしまったのですから仕方がないでしょう」

黒髪の少女はその外見からは想像も出来ないような大人びた、そして無感情な口調で金髪の少女に答えた。

「それにあなたの意思でこの島にやって来たのですよ、ミレディ」

旧い言葉で黒髪の少女は金髪の少女を『ご主人様』^{マイン・レディ}と呼んだ。この二人は主従関係にあるのだ。

「そうね。でも正直言えば、なぜこの国にあの方がやって来たのかわたしには理解できないわ。それに……」

「あの方がなんの為にこの国へやって来たのかなど、ミレディには関係ないと思いますが。どちらにしろ、ミレディはあの方を」

「わかっているわよ。でもね、やはりわたしはあの方を見つけることができないかも知れない。見つけてもわたしには……」

少女の声は、最後の方は呟きになって消えた。その色の違う瞳に、わずかに暗い影がよぎった。

「それもミレディの意思で決定するのなら問題はありません」

黒髪の少女の声は無機質だった。だが金髪の年上の少女は、わずかな笑みを浮かべてビロードのような黒髪を撫でた。

「いつまでもこんな所に居てもしょうがないわね。一休みして体調も元に戻ったことだし、そろそろ行きましょう」

金髪の少女はしなやかに立ち上がり、小さな鞆一つを手に提げて、出口に向かって歩き出した。その後ろを黒髪の少女が追う。どこか辺りを探るように、その小さな頭を左右に振りながら……。

始まりの夜

1

下弦の月が美しい夜だった。だが霧生貴夜きりゆうたかやはそんな幻想的な美しさを持つ夜空にも、その目を向ける気分にはなかった。それどころか苛立ちと怒り、そして謂われのない劣等感に苛まれ、俯くように地面を見ながら彷徨うだけだった。

それに、どうせ月よりも派手で毒々しいネオンサインの光が、あちこちに光り輝いているこの道では、情緒豊かにそれを眺めることなどできやしないのだ。

貴夜は中肉中背の目立たぬ少年だった。だがどこか鋭利な印象の面立ちと切れ長の目、そしてすっきりと通った鼻筋とやや薄いが形の良い唇の、よく見れば非常に整った容貌の持ち主である。

だが陰鬱な表情で俯き、背中を丸めるとぼとぼと歩く今の貴夜の姿は、あまりにも陰気臭く近寄り辛い雰囲気を漂わせていた。それに全身が土埃に汚れ、無数のほころびと鉤裂きに飾られた制服姿は、誰もが係わり合いになるのを恐れる風体であった。

貴夜は不良集団による苛めを受けていた。いや、それは苛めと言うより暴力であり虐待と言えるものだった。顔や露出している素肌には傷跡や痣など見えないが、制服の下には無数の青痣が残っている。

ただ貴夜はそれに対し諾々と受け入れているわけではない。どちらかと言えば反抗的な態度を示す少年だった。だからこそ、その暴力がさらに酷くなってきているのは、貴夜にも重々承知の事であった。

貴夜はプライドが高すぎる少年だった。いや、それだけではない。常にトップレベルの成績を持ちながらも、彼には少々賢さが足りないのかも知れない。要領よく立ち回る術を知らないのだ。

もちろん、貴夜には虐待を避ける為の方策はいくらでも考えついただろう。彼らが望むような従順な態度を取り、卑屈な学校生活を送るのは問題外にしても、教師に虐待の事実を告げてもよいし、いざとなれば暴力事件として警察に駆け込めばよい。

だが貴夜はそんな考えに及ぶような少年ではなかった。それはなにかに負けてしまうような気がしているからだ。

結局はプライドだけが高すぎて、他人に頼ることもできないと言う性格だと言うだけなのだろう。

ただそんな貴夜には、虐待の首謀者達を死ぬほど憎悪し、復讐したいとか、殺してやりたいとか、そう言った暗い感情はなかった。それにあてつけのように自ら死を選ぶような考えもない。ただ暴力やそれに類するものが嫌いなだけなのだ。

別に強い信念があるわけでもない。ただ貴夜がそのような性質だと言うだけだ。

とは言え、このまま黙っていてもなんの解決にもならないのは承知の事実だった。

無抵抗でいれば、いつかは相手も厭きるだろうなどと言う、そんな考えはすでに意味のない、貴夜の独りよがりな甘い考えであると思いが知らされたのだ。

それは今日の午後の出来事であった。

いつもの如く下らない理由で因縁をつけられた貴夜は、いままでない暴力に曝されてしまったのだ。

彼らと同様の暴力で反抗することもなく、許しを請うこともしない貴夜は、つい三十分ほど前までサンドバックのように扱われていたのだ。

どう考えても一人でいる時を狙われたのだろう。

普段は親友の神代^{かみしろ}顕人^{あきと}と共に下校する貴夜であったが、今日は偶

々頭人が早退していた。そして彼らはそれを知って計画的に貴夜を待ち伏せていたのだ。

彼ら 貴夜を目の仇にする虐待グループは、以前頭人に手痛い報復を受けていた。

格闘技経験があるらしい頭人は、並みの不良よりも遙かに強かった。自分は掠り傷一つ負わず、五、六人ほどのグループ全員を簡単にのしてしまつたのだ。

親友の貴夜を守る為に行なつた行為だったが、貴夜自身はそれを批判してしまつた。

暴力で暴力に対抗しては、所詮彼らと変わらないのではないかと。

もちろん、頭人の行為が嬉しくなかつたわけではない。その理由も痛いほどわかっている。なんと云つても、頭人は貴夜に取つて唯一と呼べる親友なのだから……。

だが自分の信念として、貴夜はもう二度とそう言うことはしないで欲しいと頭人に告げたのだ。実際はそれほど強い信念などないのだが……。

頭人は酷く不服そうだった。そして呆れたようにこう言った。

（この世界にはおまえが思うほど、まともな人間ばかりじゃないんだぜ。おまえが引いても、それ以上に踏み込んで来る奴は大勢いるんだ。やられてもやり返さない人間を、さらに追い込んでくる卑劣で下劣な奴がな）

頭人の言葉はある意味真実を突いていただろう。だが、貴夜はそれでも信じるつもりであった。人間の本性は善であると。

不承不承であったが、頭人は貴夜の言葉に従つた。

しかし全身に燃えるような痛み覚えるいまとなつては、貴夜の考えがいかに甘いものだったか考えさせられる。

自分のことも守れない人間は、信念を声高に叫ぶこともできない。しよせん負け犬の遠吠えと変わらない、そう云つた現実を……。

もっとも、本当に自分を情けなく思っているのは、ポケットに忍

ばせている冷たい金属の感触の所為であった。

それは父が残した形見であった。

古いデザインの、まるで中世の騎士が持つような幅広の剣を模した短剣だった。だが実用には覚束ないほどの小さな、ミニチュアの模型のような……。

武器として持っているのではない。

ただの御守りだ。

だが小さいとは言えその鋭い刃は、充分に人を傷つけることのできる凶器にも変わるのだ……。

貴夜の家までは後五分も歩けば辿り着くはずだ。もし身体を痛めつけられていなければ、駅の駐輪所に止めてあった自転車に跨り、今頃はすでに辿り着いていてもおかしくはなかったのだが……。

足を引き摺るように、重い身体を苦勞して動かしているので、普通に歩くよりもさらに時間が掛かってもいる。

ここまで来ると、繁華街から大きく外れているので、人通りもほとんどなくなっていた。その代わり、酷く寂しい暗い道が続くことにもなる。

普段は別段、そのようなことに不安を覚える貴夜ではなかったが、ここ最近の物騒な事件の所為もあり、すこしばかり神経質になっていた。どうもこの街には連続殺人鬼が通り魔の如く徘徊しているらしいのだ。

奇妙で恐るべき事件が起き始めたのは二ヶ月ほど前のことである。

この街を含めた地域で、全身から血を抜かれ、手足をもぎ取られ、内臓がポツカリとなくなってしまうた遺体が複数発見された。まるで猛獣に襲われたような無残な遺体の為か、それが人間の仕業だとは思えないと言われていた。とは言え、それほどの惨状を造り出すような猛獣の痕跡は、一切発見されていない。

あたり前だろうと貴夜は思う。

なんと言っても殺人現場は市街地なのだ。しかも、歓楽街や繁華

街の路地裏と言う場所が主だった現場であり、けっして山奥の話ではないのだ。それで人を食い殺す獣が目撃されないわけではない。それに、そんな猛獣がどこからやって来ると言うのだろうか。

犠牲者の数はすでに十二人にも上っている。だがいまだにその犯行を目撃した人間はなく、決定的な物証も見つかってははいないらしい。

巷ではこの不可解でおぞましい事件のことを、まるでホラー映画に出てくるような化け物の事件と捕らえる者もいる。笑い話ではない。

まるで昔話にある『鬼』が徘徊しているかのような、扇情的な見出しをつける雑誌記事まで書かれているのだ。

もちろん、貴夜はそんな記事を鵜呑みにするタイプの人間ではない。

普段なら笑い飛ばしてしまうだろう。いや、正直ってそんな記事は一片も信じていない。『鬼』なんてものは信じようがないだろう。だが。

人が殺されているのは事実だ。どのように無残な殺され方であろうと、それが人間の業とは思えないようなものであると、夜の街中で何人も人が死んでいるのは変えようのない現実なのだ。

普段の貴夜ならそこまで不安に駆られることはなかっただろう。だが全身に打ち身を負い、体の自由が利かないいま、そこはかとな不安を覚えても仕方がないのだろう。なにかあった時、頼れるのは己の身体能力だけなのだから……。

自宅まではあとわずかだった。この道の先を進み、二つ目の角を曲がる。するとそこに、いまは十数件しか居住している者のない小さな住宅地が存在する。

その角地にある大きな一軒家が貴夜の住居だった。

寂れた雑居ビルが立ち並ぶこの一角は、特に人通りがなかった。

二本ほど通りを渡れば、メインストリートにぶつかるのだが、この

辺りはすでに開発の波から外れてしまった地域だった。古ぼけたビルの間や細く暗い路地があちこちに存在しているので、余計に想像をかき立てられるシユチュエーションでもあった。

だからだろうか。

貴夜の耳に、獣の如き低い唸り声が聞こえたのは。

思わず足を止め、頼りない外灯の薄ぼんやりとした灯かりを頼りに、辺りの闇の奥を窺った。だがそれ以上、特に妖しい物音も聞えず、不審な人影も見当らない。

(気のせいだよな?)

ホッとしたように息を吐くと、貴夜は肩に掛けたシヨルダーバッグの位置を直し、再び足を踏み出した。

その途端、逝く手を遮るようにして、黒く大きな影が目の前に現れた。

呆然として貴夜はそれを凝視した。闇の中に、紅い二つの輝きが浮かんでいる。

「おかしい。確かにあの方の波動を感じたのだが……」

低い、そして擦れたような声で、紅い眼の持ち主は呟いた。日本語ではあるが、どこかイントネーションがおかしい。

闇の中からそれはゆっくりと身を顕わした。

全身を黒いマントのようなもので覆い、貴夜の目線よりかなり高い位置にあるその顔だけが露出している。身長は二メートルに近い大男だった。

街灯の弱々しい光に照らされた男は、短く刈った赤茶けた髪をして、そして尊大な鷲鼻と爛々と光る紅い眼を持っている。四角張った顎にも短い髭が生えていた。

日本人ではない。その詳しい人種まではわからないが、きっと欧米人であろう。

「な、なんですか?」

紅い眼に射竦められながらも、その異様な風体の男に向かい、貴夜は問いかけた。

「貴様 何者だ？ 『闇の種族』とは思えないが、貴様からは同族の、しかも『闇の主』^{ダーク・ロード}の持つ波動を感じる。 しかもあの方に極めて近い波動を」

男の声は陰々とした声で男は、貴夜の問いにさらに問い返す。背筋にぞくぞくとしたものが走った。その風体と言い、意味のわからないその言葉といい、どう考えてもこの男は普通じゃない。

「何者つて 『闇の主』^{ダーク・ロード}？ なんですかそれ？ ぼくはただの」

そう答えながら貴夜は、目立たぬようにゆっくりと後退りした。すこしずつ距離を置き、一目散に逃げ出そうと考えていた。

（どう見てもコイツはヤバイ！ もしかしたらコイツが通り魔なのかも……？）

そんな貴夜の考えを知ってか知らずか、その大男は半眼になつてなにか考え込んでいた。紅い眼で貴夜を見据えているように見えるのだが、特別にアクションを起こす気配を見せていない。

「ふん。やはりまだ人間であることは間違いないようだ。覚醒する以前と言うことか。だが、『闇の主』^{ダーク・ロード}の力を秘めている稀な存在だ」

男はそう言つて幽かな笑みを浮かべた。その笑みは尊大で、真紅の瞳には無慈悲で邪悪な輝きを宿しているように見えた。

「少年よ。貴様は今宵の獲物に相応しい。我が血肉となり、魂を分けあう栄誉を貴様に与えよう」

男は大きく唇を歪めた。するとその歯が剥き出しになり、通常の人間にはあり得ないほど発達した犬歯が剥き出しになった。

貴夜は瞬時に判断し、肩に掛けたバッグを思い切り投げつけた。そして男に背を向けて一気に走り出す。

足が痛いとか疲れているとかは言っていられなかった。それほどあの男からは恐怖を感じていた。身の危険を心の底から覚えたのだ。

通りから引つ込んだ路地に飛び込み、さらにその奥に向かって走

る。ビルとビルの間にあるこの道を通り切れば、大通りに出て行くはずだ。そこなら人通りも多くなるから、あの男もそこまでは追いかけて来ないだろう。

そう思っていた。だがすぐに、希望は絶望に変わってしまった。

道を一本間違えたことに気づいたのは、そこに壁のようにそそり立つ、コンクリートブロックとその上の金網を見たからだだった。

行き止まりだった。袋小路だった。

背後になにかの気配を感じた。微かだがアスファルトの上を歩く音がする。

(アイツなのか？ アイツが追って来たのか？)

貴夜は背中に冷たい汗が吹き出すのを感じた。振り向き、それを確認するのが恐ろしかったが、それでも貴夜は慌てて振り返った。

予想は外れた。振り返った先には、あの不気味な大男は見えなかった。

蒼白い幽かな月の光の下、そこには一人の少女が所在なげに立っていた。どこか落胆したような表情でこちらを見ている。

貴夜は声を失ってしまった。ただ呆然と少女を凝視している。

貴夜は衝撃によって棒立ちになっていたのだ。しかしそれも無理はなかった。

その少女は美しかった。まるで天才職人の手によるビスクドールのような、滑らかで白いその整った貌。白いドレスに身を包んだ、ほっそりとしたその身体。

見た目は貴夜と同年齢らしいが、その落ち着き払った仕草はどこかはるかに年上のものに思える。

月光に照らされたその長い髪は白金に輝いていた。まるで月の光そのものを編みこんだように……。

幽玄の美を体現したような少女。

人の姿をした人ならぬモノ。

貴夜にはどうしても目の前に居る少女が、この世のものとは思え

なかった。

不思議な色合いのその瞳は、左右の色を違えている。それがさらにその少女をまるで妖精のような、もしくは天使かとも思えるように見せているのだ。

「あなた 何者なの？ 血族の一人なのかしら？」

少女の声はその外見と同様に美しく、まるで心地良い音楽のような調べを奏でた。だがそれ以上に、貴夜はその言葉を聞いて愕然とした。

それは先ほどの大男が貴夜に問うたのと、まったくおなじ言葉だったからだ。

「ちよつと。なんとか言いなさいよ」

その声には似合わないような言葉であった。口調も苛立たしげだ。だがそのことにより、貴夜の精神状態は現実に対応できるように回復した。

「ぼ、ぼくは……。ちよ、ちよつとまってくれよ！ いきなりなんだよ！ ぼくが何者かだって？ いったいそれがなんだと言うんだよ！ 君もあの男のように、『闇の主』ダーク・ロードがどうか言い出すのか？」

貴夜がなかばキレ気味に叫ぶと、次の瞬間、その金髪の少女の表情が強張った。

「いまなんて言ったの？ 『闇の主』ダーク・ロードと、そう言ったわね？ なぜあなたはその言葉を知っていると云うの？ 誰がその言葉を教えたの？」

続けざまに少女は詰問してきた。そしていつの間にか、貴夜と目と鼻の先に近づいていた。

目の前にある少女の、陶磁器のように滑らかなその頬と青と紫の瞳を見つめると、貴夜の頭はぼうつとしてきた。『美し過ぎて恐ろしい』と言う言葉が、まさに当て嵌まる容貌である。

「ねえ、なんで答えないのよ」

少女はさらに顔を近づける。甘い吐息が頬に触れるほどの距離だった。

心臓の鼓動が早く、そして強くなるのを感じた貴夜は、舌が痺れたようににも答えることができなくなっていた。

「もう、いい加減になにか答えたらどうなのよ。まさかあなたが、世間を騒がせている『オーガ』ではないでしょうね？」

まるで宝石のサファイアとアメジストのような瞳は、魂が吸い込まれるような不思議な力を持っていた。

「だ、だからぼくはそんなこと知らないよ！ 『闇の主』ダーク・ロードだの『オーガ』だの、なにを言っているのかさっぱりだ！ 君こそ何者なんだよ！」

貴夜はその不思議な瞳から強引に顔を背け、その力を振り切った。少女は一步後退し、小首を傾げながら貴夜を凝視した。そして白くたおやかな指を顎に当てる愛らしい仕草で、

「わたしの思い違いだったかしら？」と、呟いた。

その声には落胆と共に安堵の響きがあるように感じられた。

貴夜の全身から力が抜けていった。緊張に次ぐ緊張を強いられた精神が、いきなり弛緩してしまったのだ。

ガクガクする膝を両手で押さえ、大きく息を吸い込んだ。そしてまだこちらを見つめている金髪の少女を上目遣いで窺うと、少女は鮮やかな笑みを浮かべてこう言った。

「ごめんなさい。どうやら相手を間違えたみたい」

そして少女はゆっくりと後ろを向いた。

その視線の先には、あの不気味なマント姿の大男が立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2947z/>

『ダーク・ロード 黄昏に抗う者』

2011年12月10日13時43分発行